
1

a

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1

【Nコード】

N4984W

【作者名】

a

【あらすじ】

T o o D r u n k T o W r i t e

Too Drunk To Write 1

今日の精神科の待合室の酷さといったらなかった。隅のソファに腰掛けた、黒いＴシャツ黒い短パン、という見るからに異様な風采の小男が裏声で何事か喋っていた。独りで。また、青い作業着姿の初老の男が工具片手に待合室へ頻々と出入りしているのは、どうやら音響設備が故障している様子で、普段は気にも留めないクラシック音楽さえ流れない始末、それだから小男のぎゃあ、とか、ひゃあ、といった呻きとも何ともとれぬ碎かれた日本語が否応なく耳に入ってくる。私は見てはいけないものを見てしまったとき特有の、ある種の戸惑いを覚えた。そしてこのまま抗不安薬を服^のみ続けていたら、いずれは我が身もかくの如き末路を辿るのかも知れないといったうら寂しい展望が予見された。

時刻は既に十七時を回っている。予約していたのはその時間だが、精神科に限らず病院で診療時間がずれ込むのは周知のことで、だからその間、小男の創出する奇矯な新言語などに耳を傾けず、往來で煙草でも吸ってあればいいものだ。数分前、受付嬢からも「お呼びだし出来るのは一時間ほど後になりそうですねえ……」と申し訳なさそうに言い渡された。が、私はそうしなかった。そう出来ない理由、というか確信があった。仮に私が五分ほど席を外したとしたら、その僅か五分の間に、私の名前が呼び出されるのだろうという確信があった。絶対に。だからこの場から逃げ出すことさえ叶わない。小男の挙措に触発されたものか、私自身も徐々に落ち着きを失っていった。用もないのに携帯電話を開閉し、周囲の他の患者に視線を走らせたり、壁際に掛けてある週刊誌を手に取り散漫な心持で眺めたりした。

Too Drunk to Write 2

休日。朝の八時。冷蔵庫から缶ビールを取り出して呑む。最近、ウオッカ、ウィスキー、ジン、ラム、日本酒の類いは控えている（焼酎はもともと呑まない。臭いが生理的に駄目だ）。これらの酒は強すぎて精神安定剤とあまり相性がよくないし、それにこの頃は彼女からも禁酒するように申し渡されている。だからビールで我慢する。勿論、安物だ。駅前のスーパー『まなまーと』に行けば130円前後で手に入る。万引きは駄目だ。私はちゃんと金を払う。これが大人の生活だ。

ビールを飲んで屁をこいたら失敗してしまった。失敗、というか、腸の中身が出てしまったのだ。それも下痢便だ。薬と安物の酒と安物の刺身ばかり食べてるからだろう、最近はずっと下痢腹を抱えている。これが大人の生活だ。便所に駆け込んで確認したが、手遅れだった。ボクサーパンツの尻のところに無残な黒い染みが出来ていた。消化し切れなかった食べ物の残骸のようなものも付着している。特にボクサーパンツに愛着はない私でもこれは悲しい。朝から下痢便に汚染された下着を洗うのは本当に悲しい。なんていうか、その、分かるだろう？ これ以上、今朝のことは書きたくない。それからことは想像力というのを使って欲しい。これは人間なら誰にも備わっているらしい。私には無いが。人間じゃないのかもしれない。

他の場所のことは知らないが私の住んでいる練馬区にはいま暗雲が立ち込めていて昼なお暗い。雨も降ったりやんだりを繰り返している。こういう日は外に出たくない。傘を差して自転車を漕ぐのが億劫だからだ。世に「若いうちの苦労は買ってでも……」というが、

私は苦勞をしたくない方だ。選択を迫られたとき、常に楽な道を選んできた。これがその結果だ。路上で無縁仏になる覚悟は出来ている。惜しむほどの人生ではなかった。私が死んだ後に核戦争が起こるといい。生きているうちでも構わないが。

Too Drunk to Write 3

仕事から帰ってきてまずビール。そして少し気の利いた本を読んで音楽を聴いて、気がつくと思りについてしまう。先日計算してみたら十時間くらい寝ているようだ。夢の中で私は仕事をしている。ヘマなミスをして叱責される類いの夢だ。そして魘されて目が覚めて仕事へ行く。こんなことがもう何ヶ月も続いている。このままでは駄目だ。なんというか凄く駄目だ。ノイローゼ人間として完成してしまっている。このままでは仕事に取り殺されてしまう。

いままで仕事に取り殺されないために様々なカードを切ってきた。酒に煙草に小説に音楽に旅行にテレビにゲームにエロ本、果ては精神安定剤にまで手を染めた。しかし私の精神衛生上に何ら好影響を及ぼさなかった。だから違法薬物を喫しようと思う。違法薬物の持つ得体の知れない力でこのノイローゼから脱却だ。

私の中学時代の同窓生A君が現在ボーイズ・バーなるものに就業している。このボーイズ・バーが通常のバーとどう異なるのかはこの際知ったことではない。そのボーイズ・バーを経営する男が密に覚醒剤いわゆるシャブを扱っているという。私はA君と連絡を取り電話口で拝み倒して何とかシャブなるものを融通してはくれないかと哀願泣訴した。私の幾度にも及ぶ電話と粘着質な口吻に辟易したA君が屈してようやく約が交わされようとしたときにこれが世の習いというかアクシデントが起こった。違法薬物と絶望した男の立場に理解の無い性悪女が警察へ連絡してしまったがために経営者の男が逮捕されA君との話が潰えてしまった。この性悪女とは経営者の男の妹だったそうだ。家族なんだからそこはもつとさあお兄さんを擁護してやるべきなんじゃないかなあというか俺のシャブ、希望と救済の光に包まれたシャブ様をどうしてくれるんだよこのクソアマが。

Too Drunk To Write 4

先日、彼女と日暮里で勉強会をする。といつてもドトールでコーヒを飲みまくりながら、僕は小説を読んでいただけ。彼女はカラーコーディネーター資格取得のためのテキストを読む。僕は珍しくシラフ。代わりにカフェインと薬を多量摂取する。デート中にショートトリップするバカ野郎。まあ彼女も薬やつてるから文句は言わない。スカートの中に手を突っ込んだら殴られた。なんて乱暴な女だ。女は乱暴だ。男の繊細さを見習うがいい。僕を見よ。繊細すぎて未だにまともな職業にも就けないのだ。繊細すぎて毎日アルコール漬けなのだ。繊細すぎて友達から「死んじまえ！」と罵倒されるのだ。今は繊細な男が橋の下やゴミ捨て場に追いやられる時代だ。社会から冷笑的につまはじきにされるのだ。悲しい。僕は悲しい。あはは。

後、カラオケで乳繰り合っていたら急に電話あり。店員から「そのような行為は止めてください」と注意される。なんというか、やっぱりカラオケって監視カメラとかあるんだなと思った。

Too Drunk To Write 5

今日は仕事で日大光が丘病院へ行く。入居者を連れて介護タクシーに乗ること十分ほどで到着。天気はあいにくの雨。上着越しにもとても寒い。

日大光が丘病院には僕も過去に来たことがある。救急車で。あれは何だったかな、車に轢かれたときだったか、意識不明になって前歯を折ったときだったか。救急車には何度も乗っているのによく憶えていない。

大きな総合病院なので人待ちが多く、待ち時間が長い。その間に車椅子の入居者と話しつつ、村上春樹の『アフターダーク』を読み終える。つまらなくはないが格別面白いとも思わない。複数の男女が夜の時間を生きる話だった。間違いがなければ。

名前を呼ばれる。診察は十分ほどで終了。医師と今後の診察、通院予定について話す。少し重要な話。こういう話を僕のようなチンピラに任せるなんて、上司は何を考えているんだろう。まあいいけどね。後、処方箋を貰い、受診料を支払う。介護タクシーを携帯電話で呼んで施設に帰る。後、処方箋を薬に変える。

最近、自分の彼女から「死にたい」「もう自殺する」「云々というメールおよび電話が相次ぐ。僕はだいたい気づくせいになる。これが普通の女の場合であれば笑って聞き流せるが、僕の彼女は精神病院に五ヶ月以上入院していた筋金入りの自殺志願者だ。不安にもなる。僕は「とりあえず本を読んだら？」とアドバイスしているのだが、

彼女曰く「本なんか読めない。本を読むにも才能が要る」とのこと。そうか。本を読むには才能が要るのか。知らなかった。

以下は倉田百三の著『愛と認識との出発』（岩波文庫）からの抜粋。
> blockquote < > p < > p < たい充実せぬはかない気分で冷たい境地をうろついても、譬えば浮き草の葉ばかり揺いで根のない如く、吹けば消え散る心の靄、こんな生活をして、果ては恐しい倦怠のみが訪れても私は死にたくない。かかる生が続けば続くほど、益々運命を開拓して心の隈々まで沁み込むような生が得たい。私はあくまで生きたい。 > / p < > / blockquote < ぼろ雑巾になっても生き抜く。感受性も想像力も抹殺して、最後まで生きる。彼女にはそれが分かってない。僕も分かってないけれど。何故なら死にたいのは俺の方だからだ。

Too Drunk To Write 6

曇。午前七時頃に起床。午前中はビールを呑んで呆けている。午後は練馬高野台駅前のブック・オフで漫画を眺めて時間を潰す。自分は本当におしまいだと思う。終ってる。何もかも。小説を幾冊か購入。後、図書館へ行き『神様のいない日本シリーズ』返却、新たに穂村弘『によつ記』借りる。日記。なんだろうと思う。エッセイとはまた異なる面白みがある。と思う。少し笑う。少しほんわかとした気分になる。僕もこんな風に生きたかった。でも無理だった。

私の職場、老人ホームに住む某老女の口癖は、「何かすることはないのっ！」だ。この老人が、精神病院を出てから此方に越してきた現役の癲癇病患者であることを差し引いても、この言葉は哀しい。七十年、八十年と生きてきた結果が、「何かすることはないのっ！」。僕を含めスタッフは様々なレクリエーションを提案するが「こんなつまらないわっ！」と何もかも一蹴してしまう。そして自分の居室に引きこもる。自分の将来を見ているようだ。少し言い方は悪いだろうがこれがたいていの人生の「末路」なんだろう。何もするところがない。辛いだけの時間が流れていく。それで死ぬ。あれもつまらない、これもつまらない、こんなはずではなかったのに、とか何とか。生きるって悲惨だなあ。人の一生なんて悪い夢みたいだなあ。はやく醒めてくれないかなあ。

『によつ記』『によによつ記』には、ときどき「天使」という謎の人物（？）が、筆者であるところの穂村さんの日記に現れて生活に少しだけ干渉する。日記にさえ嘘を書くのは人間としてどうなのか、とも思えるが、もうそうでもしなければ生きていけないのか、とい

う哀しさがある。バカ正直に日記を書いたり、現実を見たりしなくてもいいんだな、とも思う。きっと。もう現実逃避しかないんだ。他にどうしろというのか？ どうしろっていうんだよ？ さしあたり死ねばいいのだろうか？

酒を呑みながらうだうだ書いていたら、もうこんな時間だ。おやすみ。また明日。

Too Drunk To Write 7

休日。快晴。だというのに本屋と喫茶店くらいにしか行かない。いつも同じコースをぐるぐる回る。家↓本屋↓コンビニ↓喫茶店↓スーパー↓家。まるで何かの罰のように、休日に来るたびにぐるぐる回っている。ぐるぐる。

駄目な大人になったな、と思う。僕以外のみんなは、休日になるとどこへ行っているんだろう。パチンコ、風俗店、精神病院、刑務所。果物ナイフを懐中して上司の家の周りをうろついたり、あるいは自宅で残った仕事の整理でもしているのだろうか（僕もたまにそういうことをする。もちろん後者のことだが）。まったく、見当もつかない。

職場の同僚は海外旅行へ行ったそうだ。他にも温泉だとか、スキーだとか。旅行、か。

以前、何の目当てもなく電車に乗って知らない駅で降りるようなことをしていた。旅行気分を味わおうと思ったからだ。しかし何の意味もなかった。知らない本屋に寄って、知らないコンビニに入っただけだった。知らない喫茶店に入って不味いコーヒーを飲まされただけだった。虚しかった。ひたすら虚しかった。家に帰って少し涙ぐんだ。場所を移しただけで今より幸せになれると思ったのが浅はかだった。以上の経験から、旅行をするような連中はきっと頭がおかしいんだと確信した。

昨日、とつぜん迷惑メールが来るようになったので、携帯電話のア

ドレスを変えた。他、忘年会の誘いが二件。クリスマスは彼女と過ごす予定。僕みたいな、見ているだけで殴りつけたくなるような、腐り果てた生物でも、いちおう年末は忙しい。クリスマスはホテルを予約した。後はもちろんセックスだ。彼女に「後はもちろんセックスでしょ？」と尋ねたら「あなたって本当に下品ですね」と云われた。

Too Drunk To Write 8

二十五日は午後七時半に仕事を終えてすぐに石神井公園駅で電車に飛び乗り、一時間半ほどかけて千葉の天王台駅まで行き彼女に落ち合う。車内にて『寺山修司青春歌集』読み終える。「無名にて死なば星らにまぎれんか輝く空の生贄として」「夕焼の空に言葉を探すよりきみに帰らん工場沿いに」。到着して彼女から出会いがしらに「遅えよ！」と言われ、みぞおちを殴られる。こういう即物的な暴力に訴える女は詩情を解さないと思った。酒を呑んで予約していたホテルにチェックインして酒を呑んで夜が更けるまで性交して酒を呑んで寝た。お互いに抗鬱剤を服んでケミカル・セックス、今日も薬の副作用のせいで射精せず。彼女から「本当にあんたは不能だよね！」と言われる。傷つく。でもクリスマスプレゼント貰う。中身は、内緒。

二十六日は僕は休み、彼女は仕事だったので午前九時頃に駅で別れて僕はそのまま池袋へ行つてブックオフに入る。珍しい本を105円で買い漁る。奥泉光の『バナールな現象』は何年も前から捜しているが今回も発見できず。代わりというか同じ著者の『モーダルな事象』を購入。奥泉さんの本は高い。他、丸谷才一のエッセイ二冊、川端康成の『花のワルツ』。今回もやはり丸山健二の『争いの樹の下で（下）』。『虹よ、冒涇の虹よ（下）』ともに見当たらず。両方とも上巻だけ持っている。下巻だけ見つからない。畜生め。僕がツイてないだけなのか。帰りに喫茶店で本を読んでから拙宅へ。酒を呑んで寝る。

坂井君から電話。「死にたい。一緒に死んでくれ。」との由。後、

彼女から電話。「死にたい。一緒に死んで。」との由。何故なのか知らないが僕の周りには僕と心中したい人が多い。僕に股を開く女はほとんど皆無なのに。世の中どうなってるの？ 順序が違つたろ。自殺する前に僕に股を、じゃねえや心を開くべきだぜ。胸襟開いて語り合ふべきだぜ。

まあ僕は面倒だからそんなことしないけど。

これも順序を間違っていると思うんです。こんな世の中ですから、「死にたい。」とストレートに言つても（書いても）、「勝手に死ね。」と返されるのが落ちです。それよりも、例えば坂井君の場合、「今、自分の働いている会社が倒産しかかっています。そのうえ弟が働きません。」とでも書いた方が世間の同情を集められると思います。世間の同情を集めたいのなら。僕はどうでもいいんですけどね。このブログも凄くプライベートなものですし。そも誰も読んでないですし。僕はとりあえず彼や彼女に「酒でも呑んだら？」といい加減なアドバイスしてお茶を濁しています。人に偉そうにアドバイスしようなんて考えたくもありません。馬鹿馬鹿しい。だいたい僕は身銭を切つて何十万も金をつ込んで本を読んで、それらしい言葉を蒐集して、ようやく生きながらえているんです。それをタダで、簡単に「秘密」を教えるほど、僕は優しくありません。誰だつてそうじゃないですか？ たぶん。

今日も酒を呑んでハッピーな気分。あとは本を読んで寝るだけです。今日も幸か不幸か生きながらえた！ 年末年始も仕事だ！ 死にたい！ あつ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4984w/>

1

2011年12月27日21時55分発行